

教職大学院各部長から

総務部長 宍倉 慎 次



「感動が人を動かし、出会いが人を変えていく」

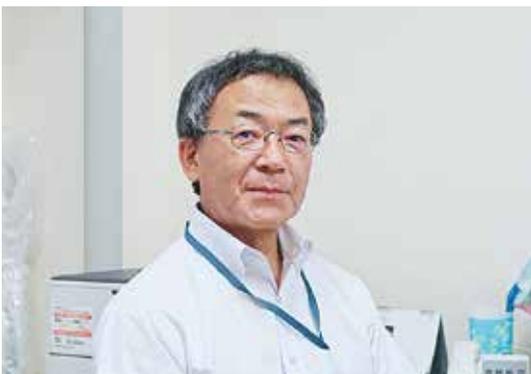
かつて、子供達や先生方に「感動が人を動かし、出会いが人を変えていく」ということを折に触れ語っておりました。この言葉は、詩人であり書家でもあった相田みつを氏の言葉ですが、その内容は語り尽くせぬ深みがあると思います。

学校はトラブルや難しい課題も多々ありますが、子供達のはじける笑顔や成長ぶりに感動しながら、充実した日々を送れる職場です。さらに、子供達だけではなく個性豊かな先生方や保護者との出会いにより、人として大きく成長することもできます。しかしながら、私達教員は、米国の教育者である

ウィリアム・ウォードが語ったように、「生徒の心に火をつける」教育プロフェッショナルとなるよう常に謙虚に学び続けなければいけない専門職です。

本教職大学院は、授業が終わって誰もいない演習室で、理論と実践との往還・融合を目指して、実習に備え指導力に磨きをかけている院生もいれば、メンティー（指導される側＝学部卒の院生）にメンター（指導する側＝現場から派遣された院生）が、「やって見せ言って聞かせてさせてみて」、「心に火をつける」上手な声かけがあちらこちらで聞かれる最高学府です。そんな学び舎で、私達と共に切磋琢磨し、子供達の夢を叶えられるよう研鑽を積みませんか。

教務部長兼FD推進部長 敦 川 真 樹



「生活様式の変化・・・子どもたちへの影響は？」

人類はこれまでの600万年、大半をサバンナで狩猟採集生活をしてきました。そして、ここ数10年、パソコン、携帯、インターネットが生活の主流になりました。

アンダース・ハンセン氏は、「一流の頭脳」（サンマーク出版）の中で、「人類の歴史において、ほんの短期間に生活様式が変わり、それによって、身体を動かす必要性は半分に減った。人類の進化が何万年もの年月をかけて緩やかに進むことを考えると、生活様式の変化に、肉体が追いついていない状態である」と述べています。

最近「スクリーンタイム（ST）」という言葉をよく目にします。テレビやスマートフォンなどの画面視聴時間のことで、その増加が指摘されています。

10代の若者を対象とした調査で、2～3人に1人が学校を自分の居場所として感じられないと答えています。一方で、多くの子どもたちは自宅に居心地の良さを感じているそうです。子どもたちは、インターネットの世界の居心地の良さを感じていると答えています。

こうした生活様式の変化は、子どもたちの遊びや運動、直接的な人とのかかわり合いの減少につながり、今後子どもたちの心と体の健康や人間形成への影響が懸念されます。

実習部会長 中谷保美

私からは、今年度の教職大学院の実習の実施状況を報告します。年度当初、弘前大学内で発生した新型コロナウイルス感染症の影響で、学部卒院生が近隣の実習協力校で行う「フィールド実習」の開始が若干遅れたり、教育関連施設の「観察実習」の一部をオンラインで実施したりすることがありましたが、その後8月までは、多くの実習は、おおよそ計画どおり進んできました。

しかし、本県でもデルタ株の影響とみられる新型コロナウイルス感染症が急拡大したことを受け、9月に入り、教職大学院の目玉の一つである実習の一部が一時中止となっております。また、現在、当該実習の一部を大学院内で代替実施しております。

10月以降は、すべての院生の、教師としての実践力を一層伸ばしていくため、教職大学院教員が一丸となって、関係教育委員会や実習協力校等との連携を図りながら、本格的に実習を再開していきたいと、決意を新たにしているところです。

入試フォローアップ部会長 小林央美**入試広報は「学びの欲求に火をつける」こと**

「学びの欲求に火をつけること」……入試広報の核はここにあるのではないかと感じます。教育者ウィリアム・アーサー・ワードの「The great teacher inspires」です。教職大学院への入学を決意するには、現職教員も学部卒の方々も、それぞれのライフステージを振り返ったり、先を見据えたりしながら熟考され、悩まれることもあるかも知れません。これまでの入学院生の声をお聞きすると、そんな時に背中を押してくれたのは、先輩の先生やゼミの先生のお言葉だったよう

です。そして、もう一つは、教職大学院のカリキュラムのようです。「理論と実践との往還・融合により確かな力が身につくような気がする、2年間を通じて様々な実習があることで現場に即した学びができそう」と考えたとのことでした。その思いに応えるように、1コースだった学部卒のコースは現在、学校教育実践コース・教科領域実践コース・特別支援教育実践コースの3コースとなっております。より一層、学部卒院生のニーズや時代に即応した発展的改組を行いました。また、2022年度入学生入試より一般選抜の他、推薦特別選抜もあります。

現在、入試広報は鋭意努力しております。努力が実り「雲外蒼天」となることを願うところです。

ミドルリーダー養成プログラム開発専門委員会報告

本委員会は県教育委員会の指導主事等と教職大学院教員で構成し、両機関が協働して、教員や指導主事の研修プログラム開発に取り組んでいます。今年度の取組から3つご紹介します。

(1) 今年度新たに開講した充実期研修講座

本講座は、本県の教員育成指標のうち「充実期」に焦点を当て、期待されるマネジメント力や指導力の向上を目指すプログラムです。本学主催・県教育委員会共催、各校長会の後援により、「独立行政法人教職員支援機構（NITS）コラボ研修」として実施しました。校長推薦を受けた30代後半～40代の教員26名から、申し込みがありました。

本講座の特徴は、オンラインと集合研修を組み合わせ、各校の実態に合わせて本学教員がきめ細かなコンサルテーションを行う点にあります。

7月末のオンライン・ガイダンスの後、受講者各自が動画を視聴しそれを踏まえたワークに取り組みました。9月上旬の第1回集合研修は、コロナ感染防止のため急遽オンライン開催となりましたが、取り組んできた

ワークと菊地一文教授の講義を踏まえて協議し、所属校の改善に向けたアクション・プランを作成しました。10月には、オンライン上で設定テーマごとに集まり進捗状況を踏まえたコンサルテーションを行う予定です。そして、11月の第2回集合研修で成果を報告し、チーム学校や外部連携など最新の教育動向や法規に関わる講義を受けて、一連の講座が終了します。

(2) 2年目の指導主事研修会

7月10日(土)に開催し、八戸会場と弘前大学会場で計40名の参加がありました。中野博之教授による学校現場での助言についての講義、修了生による若手指導主事座談会の後、指導主事経験のある山谷光寛先生(つがる市立木造中学校校長)と成田昌造先生(青森中央学院大学教授)から講話をいただき、所属や校種を超えた協議の時間をもちました。事後アンケートでは、「知識の深まり」「個人の成長のニーズ」「研修構成・内容」「主体的な学びの機会」の項目でいずれも高い評価を得ました。

(3) 八戸市教育委員会ミドルリーダー経営力アップ研修講座 (4) 校内研究編

中堅教諭等資質向上研修に加え、今年度新たに教職大学院で講座を担当させていただきました。「研修のデザインとファシリテーション」について吉田美穂准教授が講義し、修了生の下村亘先生(八戸市立旭ヶ丘小学校)が実践研究事例を紹介しました。Google Meet 上での実施でしたが、チャットやFormsで受講者の声を反映したり、ルームに分かれて協議しJamboardの付箋で共有したりするなど、ICT研修の側面ももたせました。

令和3年度 2年次院生による中間報告会及びホームカミングデイの開催



昨年度の年次報告会

昨年度、令和3年2月12日(土)の年次報告会で、現在の2年次院生が自身の研究テーマをもとに取組内容を報告いたしました。それから約8ヶ月が過ぎ、そのとき頂きましたご意見をもとに取組を深化させ、実践研究を行い、子供たちの資質・能力を高める教師を目指すストレートマスター、組織を活かして学校課題解決に取り組むミドルリーダー、双方共に中間報告会に向け頑張っているところです。今年度は、中間報告会を以下のとおり行います。「対面」方式と「Zoomによるオンライン」方式を併用することで、万が一の新型コロナウイルス感染症拡大に備えるとともに、遠方からも気軽に参加していただけるよう、このような形にさせていただきました。チラシも配布させていただきましたが、改めて皆様のご参加を心よりお待ちしております。

【日 時】 令和3年11月7日(日) 8:45~16:40 [受付] 8:20~

【会 場】 弘前大学教育学部& Zoomによるオンライン会場

【第1会場】 1F 大教室 (主会場) 【第2会場】 2F 大教室

【第3会場】 1F 中教室 【第4会場】 3F 302教室

【次 第】 (1) 全体会開会 (8:45~8:55、【第1会場】 1階 大教室)

(2) 2年次学校教育・教科領域・特別支援教育実践コース院生研究報告
(9:00~10:54、【第1会場】 1F 大教室)

(3) 進学説明会 (11:00~11:20、2F 大教室)

(4) 2年次ミドルリーダー養成コース院生研究報告

(12:00~14:06、【第1会場】 1F 大教室、【第2会場】 2F 大教室)

(5) ホームカミングデイ [修了生の発表及び在学院生との討議]

テーマ:「教職大学院での学びと教育現場とのつながり」

(14:20~16:34)

(6) 全体会閉会 (16:34~16:40、【第1会場】 1F 大会議室)

【申込期間】 9月1日(水)~10月29日(金)

【申込み方法】 右記QRコードもしくは、下記のURLから申込フォームにアクセスにて。

■「中間報告会」申し込みフォームのURL <https://forms.office.com/r/e6kSGB06nt>



中間報告会に向けて

M2ミドルリーダー養成コース 阿部 哲人

テーマ：生徒が主体的に健康な生活を送るための健康教育の在り方
— 全校体制で取り組む体力・健康づくりを通して—



実践研究1年目の昨年度は、勤務校における教育課題の実態把握と課題解決に向けた体制

づくりや実践内容について、同僚や関係機関の方々との協働において考案し、計画を立てました。この計画を土台として、本年度はコロナ禍の中ではありますが、できない理由を探すのではなく、できることをできる範囲で実践しています。清掃終了後の体力づくり、健康集会、健康教育通信等の実践における成果や課題について整理し、報告したいと考えており、報告会では多くの質問をいただき、さらに研究を深めていきたいと思っております。

M2ミドルリーダー養成コース 木村 忍

テーマ：確かな「数学的な見方・考え方」の育成を目指した取り組みについて



— 授業改善の視点を持ち続けるために—

確かな「数学的な見方・考え方」を生徒に育成するためには、教師の授業改善が望まれます。

この研究テーマのもと、私は勤務校において今年度3回の授業研究を計画していました。7月の第1回目は実施できましたが、新型コロナウイルスの影響で9月の第2回目は実施できませんでした。第3回目は11月下旬を予定していますので、中間報告会では第1回目までの授業研究の成果を報告したいと思っております。

M2ミドルリーダー養成コース 齋藤 朗

テーマ：「組織としての学校の力」を高めるための校内研修の在り方
— 対話型校内研修の実践をととして—



校内研修の在り方について思いを巡らせながら一年間、大学院での講義を受講しまし

た。一見テーマには関わりの無いような講義でも、自分なりに関連性を意識しながら受講すると新たな発見があり、おかげさまで学校教育全体を見通す視点をわずかではありますが持つことができました。今年度はその思いを校内研修計画に込め、責任感をもって職責に邁進しています。スクラップアンドビルドを意識し、教員に対して負担感を感じさせない取り組みを実践しているつもりです。学校教育の現場にいと、研究のためだけに教育活動を行うわけにはいきません。いかに日々の活動に私のねらいを含ませることができるかが肝要だと思っています。研究と教育活動の両立の在り方に悩む今だからこそ、中間報告会での発表に対し忌憚のないご指導・ご助言をいただくことで、これからの活動に役立たいと思います。

M2ミドルリーダー養成コース 佐藤 雄大

テーマ：逆向き設計による農業科の授業づくり
— 高等学校 農業科 果樹 単元「果樹の栽培と管理・評価(リンゴ)」—



私は逆向き設計による授業づくりをテーマに掲げ、農業科の授業でパフォーマンス課題

を用いた実践研究に取り組んでいます。生徒・教員が活動前にルーブリック(評価基準)を共有し、授業に関わる全員が「なぜ学ぶのか」「何を頑張ればよいのか」という羅針盤を持って座学・実習に臨んでいます。今回の発表では教職員との協働、ICT機器の活用、課題実施前後の生徒の変容などを報告する予定です。どの校種や教科でも応用できるように内容を工夫しますので、どうぞよろしくお願いたします。

M2ミドルリーダー養成コース 澤田夕香子

テーマ：地域づくりに参画する態度を育む「ふるさと学習」
— 総合的な学習の時間を中心に—



子どもたちの「地域づくりに参画する態度」の育成につながるような「ふるさと学習」の展開について、今年度

担任している1学年の生徒を対象に、授業実践を進めています。当初計画したように実践が進められない部分はありますが、中間報告会では、学習

活動の中で見取ることができた子どもの姿、言葉や成果物で子どもたちが表現したものなど、これまで蓄積できたものについて報告できればと思っております。

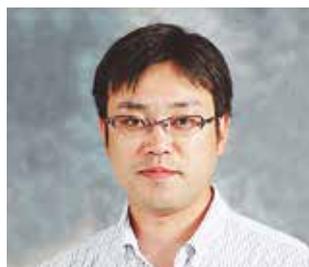
M2ミドルリーダー養成コース 相馬 昌文
テーマ：望ましい行動を引き出す学習環境づくりと児童の規範意識の変容について



ークラスワイドで取り組むPBISとSELの活用を中心にー

本研究では、児童が望ましい人間関係を構築することによって、よりよい学校生活を送ることができるという理念のもと、学年全体を対象としたポジティブな行動介入と支援(PBIS)の実施及び社会性と情動の学習(SEL-8S)を授業で取り組むことで、適応行動の増加や学習環境の整備、社会性スキルの獲得による規範意識の向上が図られていくと考えます。また、よりよい人間関係や自他を思いやって行動できる学級集団への成長が期待できると考え、今年度行った実践をもとに現在までの進捗状況をご報告させていただきます。

M2ミドルリーダー養成コース 山本 隼人
テーマ：生徒の社会的能力を育み、学校適応感を高めるための取組について



ーSEL-8Sプログラムの実践と学校適応感尺度アセスの活用を通してー

育成を目指す社会的能力(社会性)を明確にし、既存の教育活動との関連を図りながら予防・開発的な指導・支援を行い、生徒たちの社会的能力の育成及び学校生活への適応促進を図るための取組がどうあればよいかという課題意識のもと、日々の教育活動に向き合っています。今年度は1学年の担当となりました。実態調査をもとに授業の実施計画を作成して、学年スタッフとの協働のもと授業を行い、実践的に研究に取り組んでいるところです。中間報告会では、これまでの実践における成果や課題を報告し、今後のよりよい研究の在り方について考察を深めていけたらと考えています。

M2ミドルリーダー養成コース 六角 健太
テーマ：特別支援学校高等部における朝の運動(体育)の効果的な取組について



ー卒業後に自ら健康や体力の維持・向上に努めていくためにー

知的障害特別支援学校高等部において、卒業後の健康的自立、すなわち体力の維持・向上や心身の健康の保持増進に、生徒自らが努めていくための効果的な取組を目指して、勤務校においてたくさんの協力をいただきながら、研究を進めています。中間報告会では経過報告の他、高等部を卒業した方と障害者が利用する福祉施設におけるインタビュー調査から、この研究に取り組む意義や必要性についてもお伝えできればと思っています。

M2学校教育実践コース 佐藤 絢音
テーマ：UDLに基づいた十分な教育の実現を目指す授業づくりに関する研究



ー研究

本研究では、UDL(学びのユニバーサルデザイン)に基づいた授業を通して、児童の参加意欲が促され十分な教育の内容が達成されることを目指しています。現在、通常の学級で発達障害の可能性のある児童生徒の在籍が増加傾向にあることから、全ての児童が「分かった・できた」といった実感・達成感を持てる授業づくりをすることが重要だと考えています。よって今年度は、6学年の体育科を中心としたUDLに基づいた授業実践を行い追究してきました。今回はその実践を通して、児童の学ぶ意欲がどのように変化し、学びのエキスパートへと成長していくことが望めるかを授業実践での取り組みに触れながら報告していきます。

M2学校教育実践コース 鳥山 純大
テーマ：道徳的な主体への変容を目的とした



「考え、議論する道徳」研究

ーガート・ピースタの「中断」の教育と授業実践の往還ー

道徳科の目標には「よりよく生きること」が

明記されています。そして社会的な動物とも言える我々人間は、コト・モノ・自然等を含めた「他者」とのつながりを度外視して生きることは不可能と言えるでしょう。この「よりよく生きる」という道徳的課題について、主体として思考・判断・行動するための「考え、議論する」道徳が今求められています。こうした道徳教育の探求のため、「他者」とは何か、「主体」とは何かについて考えを述べた、オランダの教育哲学者ガート・ピースタの教育論に依拠しながら、道徳科教育の意義とその方法について報告したいと思います。

M2 教科領域実践コース 澤田 有里

テーマ：高等学校体育における主体的・対話



的で深い学びに関する一考察
—生徒の思考活動を取り入れた授業実践を通して—

現行の学習指導要領の課題として、主体的・対話的で深い学びの実

践を通して、生涯にわたって心身の健康を保持増進し豊かなスポーツライフを継続するための資質・能力を育てることが求められています。本研究では、各時間のねらいを明らかにし、グループごとの話し合い活動や振り返りシートによる言語活動を取り入れながら、生徒主体の活動を重視した授業を展開することで、主題の達成を目指しています。報告会では、これまでの実践と成果を報告いたします。

M2 特別支援教育実践コース 笹原 佳華

テーマ：他者とかかわり、主体的に活動に取り組むことを目指した授業づくり



「他者とかかわり、主体的に活動に取り組むことを目指した授業づくり」をテーマに、1年次の遊びの指導や自立活動の実践を進展さ

せ、2年次は帰りの会で児童がお互いの頑張りを表彰し合う「キラキラさん発表」の活動を設定しました。本活動では、他児が頑張っている姿の写真を選んだり、周りから認められたりすることを通して、教師や他児との相互交渉の広がりを目指すとともに、その分析を通して児童の学習意欲を高め、主体的な活動場面を引き出すことにつなげていきたいと考えています。報告会では、これまでの実践の概要と成果について報告します。

前期授業を振り返って

M1 学校教育実践コース 伊藤 未祐



教職大学院に入学してから、あっという間に5ヶ月が過ぎました。4月からは、オンライン授業への切り替えや実習の延期・中止など、予期せぬ出来事も起こりましたが、周囲の先生

方や先輩、友人に支えられながら、充実した前期を送ることができたことを心から感謝しております。

特に実習の際には、実習校の先生方からも手厚いサポートを受けながら、恵まれた環境の中で惜しみなく学べることの幸せを改めて感じる事ができました。後期では、教職大学院での学びを学校現場の子どもたちへと還元できるよう、より精進して参りたいと思います。

M1 学校教育実践コース 葛西 泉花



前期の授業の中で特に印象に残っているのは、「現代の学校と教員をめぐる動向と課題」です。この授業では、『教育社会学』のテキストを用い、教育事象が社会の中で現実を持って

いる社会性や実践性・価値性について学びました。この授業で学んだ内容が他の授業にも生かされ、それぞれの内容をより深く理解できたと感じます。子供一人ひとりの社会的背景を理解し、適切な健康相談・保健指導に繋げられる養護教諭になりたいと思いました。後期は実習の日数・頻度共に増えるので、前期に学んだ内容を現場と結びつけられるよう意識して挑みます。

M1 学校教育実践コース 仲村 みなみ



私が前期の学びの中で最も印象に残ったのは、集中実習での授業実践です。小学校での授業の経験は一度きりだったため、授業実践に不安がありました。

しかし、実習校の先生方から心強いご指導・ご助言を頂き、なんとか学習指導案として形にすることができました。授業後の省察検討会では、養護教諭は学級で授業をする機会

が少ないため、養護教諭だからこそできる授業をすることが大切であることを気付かされました。これまで学んだことを生かし、私らしさのある授業づくりに取り組んでいきたいと考えています。

M1 教科領域実践コース 木村 郷



前期を振り返ると、学部の時と比べ、より充実した学習ができたと感じる。具体的事例をもとにした学習が多く、ミドルの先生方と意見を交わしながら協議を進めることで普段

知る事のできない現場の実態を踏まえながら自分の考えを確立していくことができた。また、1度の授業で複数の先生方がいることで様々な視点から意見を聞くことができ、学部では経験できなかったことを経験できた。後期に向けての抱負として、様々な文献を読んだりたくさん先生方からご指導をいただくなどして研究に向けて頑張っていきたい。

M1 教科領域実践コース 島津 杏佳



前期の講義では、あるテーマについて話し合う場面が多くあり、様々な視点からの考えを得ながら自分の考えをより深めることができました。また、実習を通して、専門教科に

おいて目指したい授業の在り方に向けた課題を設定することができました。一方で、あらゆる文章や考えを要約する力や、生徒の興味・関心を惹き出すことのできる授業の構成力や実践力などが特に不足していると痛感しました。引き続き、限りある時間を大切に、学ぶことのできる環境に感謝しながら、自分自身の課題を克服することができるように頑張りたいと思います。

M1 教科領域実践コース 中川 大輝



気がつけばもう前期が終わってしまいました。ですが短くて濃く時間を過ごせたと思います。特に実習に行った際に見えるものが広がったように思います。現場でもこれは講義で行ったものだと思えるようになりました。指

導教諭の子どもへの働きかけの意図等が分かり、学部の時よりも濃密な実習が行えていると感じています。後期も振り返った際に自身の成長を感じれるように努めていきます。

M1 教科領域実践コース 中島 柊太



弘前大学教職大学院 教職実践専攻教科領域実践コース1年の中島柊太です。前期を終えて、教職大学院という新しい環境で学ぶ講義や実習は非常に内容の濃いものであったと

もに、これから教員になるに向けてとても成長できる期間であったと感じている。特にミドルリーダー養成コースの先生方から、グループワークなどの活動を通して、時には厳しく、時には優しく、社会人としての在り方やこれから教員として生きていくための知恵を伝えていただいたことが何よりの学びになったと思っている。これからも初心を忘れずに頑張っていきたい。

M1 教科領域実践コース 濱谷 大輔



授業や課題に追われた忙しい毎日ではありましたが、前期の学びを通して、教育に対する理解をより深めることができました。中でも、学校フィールド実習は特に印象に残っ

ています。母校以外の学校の雰囲気や体感できたり、大学院での学びと実際の学校現場とを比較しながら観察することで新たな気づきを得ることができたりと、貴重な経験ができた時間となりました。後期では授業も受け持たせていただくため、実習校の生徒のためになるように尽力する決意です。また、後期の授業も前期の学びと結びつけながら知識の習得に向けて頑張ります。

M1 教科領域実践コース 三浦 峻敬



前期は各講義でミドルリーダー養成コースの先生方と同じ空間、同じ立場で議論する機会が何度もあり、自分の知らない現場の視点による意見がとても参考になりました。講義

や実習を通して得られた膨大な知識や情報をこれからの実践に生かすために、自分の中にしっかり落とし込む必要があると考えています。後期は、前期で学んだ内容を活用しながら、教科指導や関心のあるテーマについての学びをより充実させたいと思います。院生同士で協力し合い、互いに高め合っていきたいです。

M1 教科領域実践コース 宮野 純



私は、前期の授業を受けて、様々な事を知ることができました。学校がどのような組織で成り立ち運営されているか、教育の今日の課題、インクルーシブのこと、学校安全のこと、授業をどの

ように作っていくかなどを学びました。学部時代では全く知らないことを教えていただき、とても有意義な時間を過ごすことができました。また、実習も多く行くことができ実際の教育の現場を知ることができました。後期からは自分の研究テーマを基に授業実践を行っていくので頑張ります。

M1 教科領域実践コース 森川 喜介



弘前大学教職大学院で学び始めてから約5カ月、日々の講義や実習が全て印象的でした。講義に関しては、理工学部在籍していた時は知らなかったことやより詳しく学ぶことの

できたことが多く、進学してよかったと改めて感じています。大学院で学んだことを活用する場として、様々な学校で実習をさせていただきました。新型コロナウイルスの影響で当初の予定より実習回数は少なかったですが、現場で学ぶことはとても多く、実習を受け入れてくださった各学校の皆様、私たちが実習を行なえるよう尽力してくださった大学院の先生方に改めて感謝いたします。

M1 特別支援教育実践コース 野村 直樹



前期はミドルリーダーコースとストレートマスターコース全員で受ける授業が多く、私の考えとは異なる様々な角度からの意見や現場で培った経験を

踏えた実践的な意見など、教職大学院でしか味わうことのできない学びがありました。後期からは特別支援教育に関する発展科目が中心になっていきますが、前期での学びを活かして視野を広くもちながら取り組んでいきたいと思っています。

修了生インタビュー

中野 悠 (柏木農業高等学校教諭 R2.3修了生)

Q. 教職大学院に進学してよかった点

A. 入学前から教員採用試験に合格したいと思っていたので、それを達成できてよかった。働いていると今の環境もそう



だが、十分な勉強時間を確保できない。講師の方を見ていると、生徒指導や教材作成に追われて、教員採用試験準備まで手が回らないと思う。教職大学院での学びがあったからこそその合格だったと思う。

Q. 大学院での学びが現場で役立っている点

A. いろんな生徒がいて、家庭で困難を抱えている子どもや経済的に厳しいお子さんもいて、そういう子は問題を抱えていて、なかなか勉強に向かなかったりする。親との関係が悪い状況では勉強どころではない。教職大学院の「教育における社会的包摂」の授業などで学んだり、子ども食堂などに行ったりする機会もあったので、面食らわなくて済んだ。なるほどと思って、寄り添うことができた。自分自身が高校生だった高校しかイメージになかったが、実習でいろいろな高校に行けたのも大きかったと思う。

〈編集・発行〉

弘前大学大学院教育学研究科教職実践専攻

(教職大学院) News Letter 第14号 2021.10.1発行

〒036-8560 青森県弘前市文京町1番地

Tel 0172-36-2111 (代表)

メールアドレス k-daigaku01@hirosaki-u.ac.jp

HP 弘前大学教育学部 (教職大学院をクリック)

弘前大学教職大学院 入試フォローアップ部会